うたと「存在」
――『萬葉集』をめぐって――

川井博義

序　問題の所在

現在の私たちは、他の誰でもないこの「私」が、一切の物事を対象として選び取っていると考えることがある。このような発想の前提には、何ものとも関わりなく単独で「個人」というものが成立しているという了解があろう。しかしながら、日本において現存する最古の和歌集である『萬葉集』からは、そのような発想とは異なる思念を見出すことができる。例えば、

朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ吾等が泣く涙やむ時もなし
（巻二、一七七）

という歌がある。題詞「皇子の尊の宮の舎人等、慟傷しびて作る歌二十三首」に則せば、一七七は草壁皇子が崩御した際、皇子のそばに仕える舎人たちがつくった二十三首のうちの一首である。ここで歌われている悲嘆は、歌い手単独の悲嘆ではない。それは、佐田の岡辺に共に「群れ居」しつつ侍宿する舎人たちすべての悲嘆に他ならない。

一七七の傍線部では、「吾等」という表記に対し「わ」と訓ませている。音読された際には、「わがなくなみた」と歌われたはずであるが、表記する際に「吾等」と記したのである。この表記は、草壁皇子の崩御に対する悲しみが、歌い手単独のものではなく、佐田の岡辺に居合われているすべての舎人たちのものであることを意味する。つまり、「われわれ」の悲しみは「われ」の悲しみであり、「われ」の悲しみは「われわれ」の悲しみであることを示したものである。このような思念は、一体的な情感を共有する「われわれ」がまず在るという前提の上に成立している。そもそも「われわれ」が一体的な情感を抱懐しており、一七七の歌い手は「われわれ」の悲嘆を代表して歌った「われ」なのである。すなわち、「われ」の悲しみは「われ」のみの悲しみではなく、「われわれ」の悲しみなのである。「われ」の悲しみは「われ」だけで成立し得ない。「われわれ」がなくては「われ」もなく、「われ」がなくては「われわれ」もない。「われ」とは「われわれ」が共に在ることではじめて成

立するのである[1]。

『萬葉集』には、以上のような思念を見出すことができる歌々が数多く収録されている。本稿は、そもそも萬葉の人たちにとってうたとは何であったのか、彼らにとってうたを歌うという行為にいかなる意義があるのかということを、そのような「存在」をめぐる思念との関わりの中から明らかにするものである。

一 「幻視」の背景 ―「見る」ことをめぐって―

『萬葉集』には次のような国見歌と呼ばれる歌が見られる。

天皇、香具山に登りて国見したまふ時の御製歌

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　けぶり立ち立つ　海原は　かまめ立ち立つ　うまし国ぞ　蜻蛉島　大和の国は

（巻一、二、舒明天皇）

題詞にあるように、一首は舒明天皇の御製歌である。舒明天皇は香具山に登り、国全体を見渡した。すると、国原には煙が立ち上っており、海原には鳥たちが多数飛び立っているのだという。しかしながら、地理的に考えると、香具山から実際に海が見えるはずがなく、ましてや海の近辺にいる鳥など視界に入るとは考えがたい。ではなぜ舒明天皇はそのようなものが見えたと歌っているのだろうか。

この見られている対象について、内田賢徳氏[2]は、「豊かさを暗示し、象徴する記号なのである」と述べている。すなわち、国原の煙は炊飯のための煙など人々の活動を意味し、鳥たちが餌を求め参集するということは実り豊かであることを意味する。これに従えば、天皇が国の繁栄や五穀の豊穣について、香具山に登って語ったということになる。

内田氏の指摘を踏まえ、伊藤益氏[3]は、次のように述べる。「舒明天皇は、眼前にそれらの繁栄の記号をとらえ、かつ、その記号の基体として存する国家の繁栄ということそのものを、実景の深奥に観入しつつ不可視なるもの・秘匿されたものをあえて視野におさめる幻視の力によって見極めている」と。伊藤氏は、国の繁栄や五穀の豊穣をうたわれている理由を、天皇が国家の繁栄を実景の奥に見出しているからであると指摘し、これを「幻視」と呼んでいる。

では、なぜ舒明天皇は国家の繁栄を「幻視」できたと歌っているのであろうか。なぜ天皇は国家の繁栄を「幻視」する必要があるのだろうか。天皇が「幻視」する意味は一体どこにあるのだろうか。これらの疑問を解くためには、萬葉人にとって「見る」とはいかなることであったのかを把握しておく必要がある。ここではまず、「見る」ことと「知る」ことの関係を踏まえておきたい。

色に出でて恋ひば人見て知りぬべし心のうちの隠り妻はも

（巻十一、二五六六、正述心緒）

今造る久邇の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし
（巻六、一〇三七、大伴家持）

世間を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば
（巻六、一〇四五）

二五六六は、通う男がいることを周囲に知られないようにして閉じこもっている妻に対し、思いを寄せる男の歌である。恋いこがれていることが顔色に出てしまったら、それを人が見ることにより、知ってしまうだろうと言うのである。男の顔色を見ただけで一目瞭然だというのである。すなわち、視覚的に把握することが、現時点における事態の把握に直接的に結びついているのである。

一〇三七は、天平十二年（七四四年）十二月から天平十六年（七四四年）二月の難波宮遷都までの都であり、未完成のまま廃都となった久邇京に対する讃歌である。現在造営中である久邇の都、その都を取り巻く山川がすがすがしいことを見ることにより、なるほどここに都を置く意味が十分に知ることができるとの意である。ここからも、二五六六同様、眼前の山川を視覚的に把握することが、遷都という現時点における事態の把握に結びつくという思念を見出すことができる。

一〇四五は、繰り返し遷都が行われる時期に奈良の都にいた者の歌である。「世の中というものには常ということがないと今まさに知った、この奈良の都が日に日に寂れ行くのを見ると」という意である。奈良の都の衰退を視覚的に把握することにより、世の中には常がないことを知ったということである。ここでは、視覚的に「見る」ことによって把握することが、すなわち、「知る」ことであると明言されている。

以上のように、萬葉人にとって、「見る」ことは、現前する事物や既知の事物に思いを遣ることにより、事態を把握するということを意味する。だからこそ、それは「知る」という語と密接な相関関係に置かれているのである。端的に言えば、「見る」ことが、「知る」ことであったのである。

現在、「知る」と言うと、それは知識的に物事を把握することや、思い知るというように実感として物事を把握することを意味することがあろう。萬葉人の用いている「見る」と結びつく「知る」は、後者の意味が強いと考えてよい。なぜなら、「見る」ことは眼前の物事をみずからの実感として視覚的に把握することに他ならないからである[4]。

また、『萬葉集』には「～見れば～けり」という文形式を有している歌が数多く見られる。例えば、

わが背子は　待てど来まさず　天の原振り放け見れば　ぬばたまの　夜も更けにけり　さ夜更けて　あらしの吹けば　立ち待てる　我が衣手に　降る雪は　凍りわたりぬ　今さらに　君来まさめや　さな葛　後も逢はむと　心を持ちて　ま袖もち　床うち掃ひ　うつつには　君には逢はず

夢にだに　逢ふと見えこそ　天の足り夜を

（巻十三、三二八〇）

藤波の咲き行く見れば霍公鳥鳴くべき時に近づきにけり

（巻十八、四〇四二、田辺福麻呂）

という歌々がある。三二八〇・四〇四二両歌傍線部の「けり」は、気づきの助動詞と呼ばれる。気づきの助動詞とは、「ああ、今まさに～ということに気付いた」という意を表明するための機能を有する助動詞である。三二八〇では、大空を遠く振り仰いで見ることにより、今まさに夜も更けてしまったのだと気付いたと語られている。四〇四二には、藤の花房が次々と咲きいくのを見ることにより、今まさに季節はホトトギスの鳴き出す時期に近づいたのだと気付いたとある。

いずれも、何らかな対象を視覚的に把握することにより、現在における別のことに気付いたと語られている。換言すれば、見ることによって、現時点の状況を把握したのだという言明がなされていると言うことができよう。このように「見る」ことによって把握されるのは、現時点の状況だけにとどまらない。

高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つつ偲はむ

（巻二、一三三）

越の海の手結が浦を旅にして見れば羨しみ大和偲ひつ

（巻三、三六七、笠金村）

右の二首では、ある対象を、見ることと同時に、見ることを通して、何か別の物事を「偲ふ」と述べられている。内田賢徳氏[15]は、「偲ふ」とは、既知である可視的なものを想起するという意味であることを指摘している。つまり、以前見たことのある人や物を、今ここで別の何かを見ることによって思い出すということである。

二三三は、秋萩は亡くなった志貴皇子の形見であるから、それを見ながら、見ることによって、皇子を思慕したい（だからこそ、散らないでくれ）という意である。親しくしていたが亡くなってしまった皇子と、歌い手を結ぶものとして、秋萩が位置づけられている。秋萩を見ることによって、今は亡き者を把握しているのである。

三六七は、旅の途中、越前に達したが、その越前の手結が浦を見ることにより、ふるさとである大和に思いを馳せたという意である。歌い手である笠金村の故郷大和と、笠金村を結ぶものとして、手結が浦が位置づけられている。手結が浦の海を見ることによって、海の向こうに思いを馳せ、今眼前にはない故郷大和を把握しているのである。

これら二首では、現時点において眼前に在るものを視覚的に把握することにより、眼前にはないものに対し思いを馳せていることがわかる。歌い手は、眼前に在るものを通し、眼前にないものを想起している。つまり、眼前に在るものが、眼前にな

いものと歌い手を結ぶ紐帯となっているのである。その紐帯は見るという行為によって、機能している。今眼前にあるものを見ることにより、眼前にはない別の何かが把握されているのである。

先に見たように、萬葉人は、眼前にあるものを視覚的に捉えることにより、現時点の状況を把握していた。それだけにはとどまらず、彼らは、眼前にあるものを視覚的に捉えることにより、それを媒介として、眼前にはない既知のものをも把握しているのである。したがって、舒明天皇が香具山に登り、眼前の実景を紐帯として、視野に入るはずのないものを「見る」ことは何ら不可解なことではないのである。

二　うたと共存 ―「幻視」を歌う意味―

萬葉の人々にとって、眼前の実景を通して「幻視」することは不可解なことではない。しかしながら、眼前の実景から実景以外の物事を「見る」ことと、「見る」ことにより把握したことを敢えて口に出して歌うということは別の問題である。では、なぜ天皇は国の繁栄が見えると口に出して歌ったのだろうか。

「見る」に尊敬の「す」を連続させた「見す」という語が『萬葉集』に見られる。「見る」に尊敬の「す」を付けた語であるから、視覚的に把握するという意味がある。一方で、この「めす」という語は、統治する、治めるという意味として解されるものもある。例えば、

藤原の宮の役民の作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　荒栲の　藤原が上に　食す国を　めしたまはむと　みあらかは　高知らさむと　かむながら　思ほすなへに　天地も　寄りてあれこそ　石走る　近江の国の　衣手の　田上山の　真木さく　檜のつまでを　もののふの　八十宇治川に　玉藻なす　浮かべ流せれ　其を取ると　騒く御民も　家忘れ　身もたな知らず　鳴じもの　水に浮き居て　我が作る　日の御門に　知らぬ国　寄し巨勢道より　我が国は　常世にならむ　図負へる　くすしき亀も　新代と　泉の川に　持ち越せる　真木のつまでを　百足らず　筏に作り　泝すらむ　いそはく見れば　かむからにあらし　（1・五〇、左注略）

という歌に見られる「めす」がそれである。

持統八年（六九四年）十二月六日、藤原京への遷都が行われた、その際に宮の造営に携わった役民の作った歌であると題詞には示されている。五〇の「をす」は、「食」という漢字を用い「食す」と表記されている。食べること、あるいは、領有することを意味する。ここでは天皇が「をす」対象（国）を「めす」のである。

一方、「めす」とは、そもそも「見る」に尊敬の「す」を連続させた「見す」という語である。物事をみずからのものにするためには、何かと一体となる前に、その一体化する対象が何

であるか把握する必要がある。対象の把握は視覚的に行われる。こうして、「食す国を見す」は、「領有する国を把握する」という意味として解されるのである。

『萬葉集』中の「食す国」の用例はすべて、「食す」主体は天皇である[6]。天皇以外の者が国を「食す」ものとしては語っていない。したがって、「食す国」を「見す」主体も同時に天皇である。国見をするのは天皇だけなのである。

では、以上を踏まえ、先に挙げた舒明天皇の国見歌を再び検討したい。

天皇、香具山に登りて国見したまふ時の御製歌

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　けぶり立ち立つ　海原は　かまめ立ち立つ　うまし国ぞ　蜻蛉島　大和の国は

（巻一、二、舒明天皇）

天皇が山に登り、国を見るという行為は、「見す」行為に他ならない。「食す」べき国を「見す」、すなわち、領有する（している）国をみずからのものとして把握する行為なのである。そのような意味を持つ行為であるから、実際のところ目にすることが不可能だからといって、この場で「海も見えないし繁栄など見えない」などと語ってしまったら、国の先行きに対し、歌を耳にする者たちは不安を抱いてしまうであろう。

国の繁栄というものは、この歌の場にある者たちにとって、瞬間的に一時的に生ずればよいというものではないはずである。それは、過去からの営みの所産であり、同時に、未来に末永く続くべきものであろう。歌を聞く者たちが、眼前に実際のところ国原の煙や海原の鳥が見えようと見えまいと、そのような豊かな光景が見えて欲しい、見え続けて欲しいという希求することは至って自然なことである。とはいえ、国の繁栄を希求したところで、天皇ではない者たちはそれを口に出してうたうことはできない。なぜなら、国の繁栄を視覚的に把握し「見す」ことが可能なのは天皇だけだからである。つまり次のようなことである。

舒明天皇は香具山に登った。同行した人々には香具山から海原など見えない。国原の煙も見えなかったかもしれない。しかし、一行はみな国の繁栄を願っている。天皇以外の者は国の状況を把握することなど不可能である。もし国原や海原が見えたとしても、天皇以外の者がそのことを口に出したら、国を「見」した、すなわち、国をみずからのものだと把握したと宣言することになってしまうのである。したがって、香具山にいる一行の中で、国の繁栄が「見」えると語ることが可能なのは天皇しかいないのである。

天皇は人間の眼前に在る実景（空間）や、現在（時間）を越えて、人間が見ることが不可能な世界を見ている。国見に同行しうたを聞く人々にとって、天皇とは、人間が見る（＝視界におさめる・領有・統治する）ことのできない世界を見る（＝視界におさめる・領有・統治する）ことが可能なものなのである。

このように、人間には不可能なことであっても、天皇が国の繁栄を「見」ているのであれば、人々の国の繁栄に対する希求や待望は、安心へと転化されよう。これが国の繁栄が「見」えると口に出して歌うことの意義である。

天皇が人間に見えないものまで見出すという「幻視」は、次の二点によって成立している。一つは、人々が天皇は人間とは異なる立場（「食す国を見す」立場）のものであると見なしていることである。二つ目は、見出される対象（国の繁栄）はその場を構成するすべての人々の願いであるということである。香具山に登った一行は、国の繁栄を「見る」ことができる立場である天皇が、その様子を「見」ていると口に出して歌うことによって、安心を得られるのである。

さて、冒頭に挙げた「吾等（われ）」という表記に見られるように、まず一体的な情感を共有する一群があり、その集団に共通する「われわれ」の思いを代表する形で「われ」の思いがあるという思念に触れた。それは「われわれ」がなければ「われ」もないという思念であった。香具山に登った一行は、天皇によって国の繁栄が歌われたことによって、安心を得た。国の繁栄が保証される場合の安心とは、「われ」のみの安心ではなく、「われわれ」の安心に他ならない。天皇が香具山に登り、国原や海原の繁栄が見えた（幻視した）と語ることは、一行の者たち「われわれ」が「われわれ」として存続し得る保証となるのである。

このように、天皇という立場から、その立場でなくては語ることができないこと、しかしながら一行のすべてが望んでいること、すなわち、国の繁栄を、今ここで「見」たと舒明天皇が歌うことによって、一行は「われわれ」として今後とも共に存続することを保証されたのである。うたを耳にした一行は、今後とも共存する「われわれ」であることを確認した。すなわち、この国見歌を舒明天皇が歌うことで、「われわれ」の共存が約束されたのである。

三　うたと共在

先に触れた舒明天皇の国見歌は、天皇の立場でしか語り得ない国の繁栄について歌ったものであった。その舒明朝から六十年ほど後のことである。天武天皇が薨去した後、その妻である天皇（持統）は、吉野行幸をたびたび行った。夫（天武）が亡くなり八年が経過したその命日、持統七年（六九三年）九月九日に、天武天皇の冥福を祈る供養が行われた。その際に天皇（持統）が夢の中で詠み覚えたと題詞に記されている持統天皇の歌がある。それは次の通りである。

天皇の崩りましし後の八年、九月九日の奉為の御斎会の夜、夢の裏に習ひたまふ御歌一首古歌集の中に出づ

明日香の　清御原の宮に　天の下　知らしめしし　やすみしし　我が大君　高照らす　日の御子　いかさまに　思ほしめせか　神風の　伊勢の国は　沖つ藻も　靡（な）みたる波に　潮気のみ　香れる国に　味凝（うまこ）り　あやにともしき　高照

らす　日の御子　　（巻二、一六二）

ここで持統天皇は、「明日香の清御原の宮で天下をあまねくみずからのものとされた我が大君（天武）よ、あなたは『いかさまにおもほしめせか』（一体どのようにお考えになったのかは計り知れないが）なぜ、神風の吹く伊勢の国、沖の藻が靡いているその波に潮の香りばかりが立ちこめている国においであそばすのか。ただただお慕わしい日の御子よ」と語っている。夫（天武）を亡くした持統天皇は、今ここにおいて夫と共に在ることはできない。夫と共に過ごした大和の地に、天皇はひとり残されている。夫が亡くなって八年後、持統天皇は、夢の中でこの歌を詠み覚えた。その歌が一六二である。

一六二において持統天皇は次のように語っている。慕わしい夫（天武）は大和から見て山の向こうの伊勢の国にいる、と。夫（天武）はもはや今ここにはいないと明言しているのである。ここにはいずれまた逢えるかもしれないという可能性は残されてはいない。夫（天武）に対しては、ただ「あやにともしき」、慕わしいと述べるにとどまっている。大和の地は、持統天皇にとって夫（天武）と共に在る場所であった。しかしながら、夫（天武）が崩御した後、ひとり残された持統天皇にとって、その地は夫（天武）と共に在る場所ではなくなっている。

夫（天武）が崩御した直後、持統天皇は、

天皇の崩りましし時に、大后の作らす歌一首

やすみしし　我が大君し　夕されば　見したまふらし　明け来れば　問ひたまふらし　神岳の　山の黄葉を　今日もかも　問ひたまはまし　明日もかも　見したまはまし　その山を　振り放け見つつ　夕されば　あやに悲しみ　明け来れば　うらさび暮らし　荒栲の　衣の袖は　干る時もなし　　（巻二、一五九）

と語っている。一五九において、持統天皇は、「山の黄葉」を夫（天武）と共に見ることを切望している。夫（天武）は「山の黄葉」を夕方になれば鑑賞し朝になればそれを尋ねているだろうと述べている。夫（天武）と共に在ることができなくなってしまった持統天皇は、共に山の黄葉を共に見ることを切望している。ここでは、夫（天武）が山の黄葉を共に見ることができる位置に置かれていることに着目したい。

夫（天武）崩御直後の一五九において、夫（天武）は山の手前に位置づけられており、持統天皇はその夫（天武）と黄葉を共に見ることを希求している。一方、夫（天武）の崩御から八年が経過した際の一六二では、夫（天武）は山の向こうの伊勢の国に位置づけられており、持統天皇はただ「あやにともしき」と語るにとどまっており、その夫（天武）と共に何かをすることに言及していないのである。

さらに、一六二においては、夫（天武）について挽歌の常套句だと言われる「いかさまに思ほしめせか」という語を用い、一体どのようにお考えになったのかは計り知れないと語るのみ

であった。もはや一五九で語ったように夫（天武）は夕方や明け方に山をご覧になっているだろうと思うことはせず、ただただ計り知れないとのみ語られているのである。夫（天武）が崩御して八年が経過し、その供養のために僧尼を集め読経をして冥福を祈る御斎会があった夜、夢の中で一六二を詠み覚えた持統天皇は、もはや夫（天武）と共に何かをすることはできないと自覚するに至ったのであろう。持統天皇はこの自覚を一六二によって言明した。一六二において、夫（天武）は山に隔たれ、接点を持ち得ない山の向こうに位置づけられている。一六二は死者を送る歌、挽歌に分類される。持統天皇は一六二を歌うことで、共に山を見ることを望んでいた相手である夫（天武）を、山の向こうに送り、共に山の黄葉を見ることを断念したことを表明したのである。このことによって、夫（天武）は供養されたことになろう。

今見てきたように、一六二において持統天皇は、妻の立場から夫の冥福を祈っている。夫（天武）の崩御について挽歌の常套句「いかさまに思ほしめせか」という語を用い、一体どのようにお考えになったのかは計り知れないと述べ、夫の崩御をみずからの知では把握しきれないことを表明している。つまり、一六二は、みずからを超えるものを認める立場から歌われているのである。

題詞によれば、一六二は持統天皇が夢の中で詠み覚えた歌である。当時の人々にとって夢とは、ただ就寝時に脳裏に浮かぶものではなく、政治的言動をも左右するような、実際に実現すべきこととして立ち現れてくるものであったとする説がある[7]。これに従えば、持統天皇は夢に触発され、歌を大勢の前で披露することで、夢で見たことを実現したということになる。また、伊藤益氏[8]は、古代日本人が夢を「人知の限界を超出した知、すなわち超日常的な次元に存する知の闡明される場と目」していたことを明らかにしている。これらの説に則すならば、持統天皇はみずからの知を逸した超越的なる力によって夢を見せられ、一六二を歌うことによって夢で見たことを実現したということになる。歌を披露した場で、持統天皇が夢で詠み覚えた歌であることを表明したかどうかは知るよしもない。しかし、題詞に記述されている事柄が歌の場を構成する人々に周知されていたとしたら、持統天皇は人々を超越する者としてではなく、みずからを超越する力には及ばない者として一六二を歌ったということになるだろう。

先に検討した舒明天皇の国見歌（巻一、二）では、香具山から海辺付近までも視野におさめる、人智を超越した者の立場から舒明天皇はうたを歌っていた。一方、一六二において持統天皇は、あくまで夫（天武）の妻として、みずからを超えるものを認める立場、夫を供養する立場から歌っているのである。

このように、亡くなった夫を供養する立場、かつ、みずからを超越する力を認める者としての立場から歌われた一六二が、歌を見聞し受容する場を構成する人々の共感を呼んだことは想像に難くない。持統天皇は、夫（天武）は山の向こうにおり共に在ることはできないという言（こと）を、眼前の者と共有可能な形で

語ったのである。これによって、その言は共感を呼び共有され、事となったのである。

一六二が披露されることによって、持統天皇が長年抱いていたであろう「われ」の悲しみが、歌を共有する「われわれ」の悲しみとなった。うたを歌い、歌を受容する人々と悲しみを共有にすることによって、「われわれ」は共に在ることができるのである。すなわち、うたは「われわれ」が共在するための媒介なのである。

結　「存在」の絆

本稿は舒明天皇の国見歌と持統天皇の一六二を中心に、そもそも萬葉の人たちにとって、そもそもうたとは何であったのか、歌うという行為にはいかなる意味があるのかについて、その一端を論じてきた。

舒明天皇は香具山に登り国見をし、国原・海原を視界におさめたと歌った。視覚的に把握することは、みずからのものにすることであるがゆえに、そのような歌は天皇しか歌い得なかった。天皇は国見歌を歌った。天皇が国の繁栄を視野におさめたと歌うことで、その歌を受容した一行は、今後とも共に存続する「われわれ」を確認した。うたが歌われることによって「われわれ」の共存が保証されたのである。すなわち、うたは「われわれ」の共存の紐帯である。

持統天皇は夫（天武）の崩御直後、夫は山の手前に居るのではないかと語ったが、八年後、山の向こうの伊勢に行ってしまったと歌った。夫と離れてしまったと人々の前で披露することにより、うたを受容した人々とその悲しみを共有した。一六二は、あくまでも妻の立場からうたったものであったからこそ、その悲しみはうたを受容する人々と共有することができた。それにより、持統天皇の「われ」の悲しみは、「われわれ」の悲しみとなった。つまり、うたが歌われることによって「われわれ」は「われわれ」として共在することができたのである。すなわち、うたは「われわれ」の共在の媒介である。

舒明天皇が香具山で国見歌を歌わなかったならば、一行は共に存続することを保証されなかった。舒明天皇は一行の国の繁栄を希求する思いを汲み、その上で国原も海原も豊かであることが見えると歌った。一行の場の思いを汲んだ上で、みずからの立場を把握し、舒明天皇はうたを歌った。「われわれ」があるからこそ「われ」の立場があるのである。また、舒明天皇（「われ」）が一行（「われわれ」）の思いを汲んだからこそ「われわれ」の共存を保証するうたを歌い得たのである。

持統天皇が夫（天武）と離れてしまったことを歌わなかったならば、持統天皇の悲しみは誰とも共有されなかった。持統天皇は、みずからの悲嘆を天皇としてではなく、妻として歌った。妻としての悲嘆であればうたを見聞する人々にも共有可能である。持統天皇はうたを受容する人々やみずからの立場を把握した上でうたを歌ったのである。持統天皇（「われ」）が歌を受容する人々（「われわれ」）の立場を踏まえたからこそ、悲嘆は

「われわれ」のものとして共有されたのである。これにより、歌を受容する人々（「われわれ」）と共に「われ」は在ることができる。

以上のように、本稿で見た歌々は、共存の紐帯、あるいは、共在の媒介としての意味を担っていた。うたを歌い聞き、うたを共有する者たちは、うたを通して、共に存し共に在る。すなわち、うたは「存在」の絆なのである。

注

(1) 拙稿「種的共同体のゆらぎ—柿本人麻呂近江荒都歌試論—」『哲学・思想論叢』第二十二号（筑波大学哲学・思想学会、二〇〇四年）にて詳述した。また、同「大伴家持の個我意識—『われわれ』から『われ』へ—」『倫理学』第十九号（筑波大学倫理学研究会、二〇〇二年）では、「ますらを」（宮廷に仕える官人）の大伴氏である「われわれ」を「在ること」として見なす大伴家持の思念を明らかにした。

(2) 内田賢徳「『見る・見ゆ』と『思ふ・思ほゆ』—『萬葉集』におけるその相関—」『萬葉』（第一一五号、一九九三年）。

(3) 伊藤益『日本人の知』（北樹出版、一九九五年、六九頁）。

(4) ただし、「しる」の語を、知識的な把握を意味として用いる例外もある。詳細は、拙稿「知の位相と現実—大伴旅人・家持を中心に—」『倫理学』第二十一号（筑波大学倫理学研究会、二〇〇五年）にて検討した。

(5) これについては、内田賢徳「動詞シノフの用法と訓詁」『上代日本語表現と訓詁』（塙書房、二〇〇五年）に詳論がある。

(6) 「食す国」の用例は『萬葉集』中、十首十例（五〇、一六七、一九九、九二八、九五六、九七三、四〇〇六、四〇〇八、四〇九四、四二五四）見られる。

(7) 西郷信綱『古代人と夢』（平凡社、一九九三年）は、『古事記』や『日本書紀』をはじめとする様々な古代の文献を詳細に検討することで、当時の人々は夢によって王位継承をはじめとする政治的な行動を決定している例が見られることなどを指摘している。

(8) 伊藤益前掲書、一六八頁。

（かわい・ひろよし　筑波大学大学院人文社会科学研究科）